

# 琉球大学学術リポジトリ

## 歴史のなかの民俗社会 ―久高島の社会組織と祭祀的世界の研究― (要旨)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2012-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤嶺, 政信 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/24934">http://hdl.handle.net/20.500.12000/24934</a>

## 歴史のなかの民俗社会

### —久高島の社会組織と祭祀的世界の研究—

(要旨)

赤嶺 政信

本研究の課題は、民俗事象を、それが伝承されている地域の歴史的過程のなかに位置づけて考察することの意義について、久高島（沖縄県南城市）の社会組織と祭祀的世界に関する研究を通して明らかすることにある。民俗事象を、それが伝承されている地域の歴史的過程のなかに位置づけて考察することには、外部との接触・交流も含めた社会環境の変化等の影響を受けて当該地域の民俗は変化をとげるといふ事実に着目し、民俗事象を通時的視点で捉えるという視点と、民俗の形成や変化の有り様を規定するものとしての外部の政治権力の存在に注意を向けるといふ二つの研究視点が含まれている。

本研究は、「序論」「本論」「結論」で構成され、序論では、本研究の課題と方法および琉球王国時代の久高島と国家体制との関係について記述を行った。本論は、Ⅰ部「久高島の社会組織と祭祀組織」とⅡ部「久高島の祭祀と国家体制」によって構成され、本論において「久高島の社会組織と祭祀的世界」について論述したことを箇条書きにすると以下の通りになる。①～⑦は本論Ⅰ部に、⑧～⑭はⅡ部に該当する。

①、久高島では、今日では支配的理念となつている家の父系相続継承は、過去においては絶対的条件ではなかった。家筋の中に他系（非父系）の祖先も取り込んでいた従来の状況から、他系祖先を排除していくことによつて家筋

を父系血筋と整合化させようとする動きがあり、家の相続継承における父系偏重イデオロギーの流入・受容については、島外部のユタの関与が認められた。

②、久高島の家は、かなり流動的で非永続的なものであった。また、ヤシキグーン（「屋敷御恩」。空屋敷に入居した家が、その屋敷にかつて居住していた家筋の象徴である祖霊や火の神などを屋敷の一角の祠で祀ること）の存在が示しているように、かなりの数の家が家筋と屋敷との間の不整合を抱えていた。これは、つぎの③と関連がある。

③、地割制の下では、世襲地を有するノ口家などを除く一般の家には、原則として家産が伴わず、そのことが家の超世代的存続を希求する観念が久高島の家の態様に規制力を発揮するに至らない背景をなしていると推定できた。このことはまた、当社会の門中の性格の一端を規定するものでもある。

④、久高島の家には、かつて祖霊祭祀専用の祭壇（今日の仏壇）がなかった。そして、久高島の祖霊（死霊）は総じてカミと対立的な関係にあり、位牌の普及や墓祭祀の奨励も含めた祖先祭祀をめぐる近世の王府の政策は、近年に至るまで久高島にはほとんど浸透していないことが確認できた。この特異な祖霊観念や祖先祭祀をめぐる状況は、久高島の家や門中の態様に一定の影響を及ぼしていることが想定できた。

⑤、久高島の門中の系譜的構成の一つの特徴として、分家の系譜的世代深度が比較的浅いこと、および家の系譜関係の認識が明確であるのはせいぜい四く五世代までで、それ以上になると系譜関係の認識は曖昧となり、ユタの関与もあつて系譜関係の再編成が頻繁に生じていた。このことは、先の②および③と関わることである。

⑥、久高島の門中は、門中の始祖の系譜を沖繩本島の旧家に結びつける傾向が顕著に見られ、その旧家に対して清明祭などの門中儀礼が行なわれていることからして、対島外的な側面、すなわち沖繩本島にある特定の宗家との

関係においては、祖先祭祀集団としての性格をもつが、村落内では祖先祭祀集団としての機能をはたしておらず、このことは④との関連が想定できる。また、門中は、村落祭祀において重要な位置を占める農耕儀礼などには全く関与しておらず、門中の祭祀儀礼と村落の祭祀儀礼との間に連続性が認められない。その一方で、久高島の門中は、ムトゥ神祭祀集団としての性格を有していた。

⑦、在来の「ムトゥ神制」（門中形成以前の、ムトゥ神の信仰をめぐる諸事象）に門中イデオロギーが被覆したために生起していると思われる錯綜性が、顕著に認められた。

⑧、現行の久高島のいくつかの祭祀は、久高島が琉球王国時代の国家的聖地であり、国王や聞得大君の行幸が行われたこと、さらに、久高島の男たちが王府の公用船の船頭や水主を勤める公的システムがあったという事実を考慮しないと理解できない要素を多分に含んでいると考え、具体的には、以下の見解（⑨く⑫）を提示した。

⑨、十二年に一度の午年に行われる久高島独特の祭祀であるイザイホウは、聞得大君に仕える久高島の女性たちに対する、国王による一種の辞令交付式という性格を帯びており、従来の研究でなされてきたようにローカルな要素のみで理解すべきではない。

⑩、八月のヨーカービーの日の祭祀は、国王が久高島に行幸した際に、御嶽での祭祀を終え、帰路につく国王一行を村境で迎える儀式を下敷きにして成立したものである。

⑪、同じく八月のテラーガミの祭祀は、久高島に渡島してきた国王を港で歓迎し、国王一行が港から公邸である「御殿」へ移動する際に行われた道行きの儀式を下敷きにして成立したものである。

⑫、イザイホウと同じく十二年に一度の午年に行われる男性主体のナーリキ（名付け）儀礼は、元来は、久高島の男たちが公用船の船頭や水主として王府に仕えるという社会的コンテクストの中で意味をもつ行事であった。

⑬、門中化以前の村落の始祖神話とそれを背景にした沖繩本島の玉城参拝は、島を外部世界へ開く回路であり、同時にその回路は島の祭祀世界の秩序と整合的に関わるものであった。さらに、その回路は、久高島を琉球王国の中心へと結びつける要素を胚胎していたが、近代になってからその要素が活用されることなく外部からのインパクトによって門中化が生じた。

⑭、門中化現象は、近・現代の沖繩の各地で見られるものであるが、久高島の場合、島外部からのユタの圧倒的な影響のもとで、比嘉政夫（「門中研究の展望」一九八六）の指摘する「祖先にこだわり、自分を生み出した根源的なものに結びつこうとして、さまざまな系譜のなから自分と結びつく確かなものを求め」、それによって自己確認の証にするという側面よりも、むしろ、笠原政治（「沖繩の祖先祭祀―祀る者と祀られる者」一九八九）が「門中化のカミソリ現象」および「門中化によるピリヤード現象」と呼んで捉えようと試みた、従来の社会・文化形態に対して分解・分裂・動揺をきたす側面が顕著に認められた。

久高島の社会組織と祭祀の世界に関する以上の検討結果から、本研究で課題とした、民俗事象をそれが伝承されている地域の歴史的過程のなかに位置づけて考察することの意義は、以下で述べるように、十分に明らかになったと考える。

まず、久高島の家に関わる家の非永続性やヤシキグーン存在、さらには家号の実態や村落祭祀における供物の供出単位などをめぐる諸問題は、沖繩の他の地域と同様に、近代以降において沖繩本島のユタを介して父系偏重イデオロギーが流入・受容されたことに加えて、王国時代の遺制である地割制度が近代以降も存続したという久高島の特異な歴史的条件を考慮しないと、正当な理解に到達することはできないことを明らかにし得たと考えている。また、ムトウ神祭祀と門中制との間に不整合が見られることや、ムトウ神祭祀をめぐる錯綜とした状況が見られ

ることを指摘したうえで、この錯綜性は土着のムトウ神制に門中イデオロギーが被覆したために生じたものであると考えたが、このような見解の提示も、通時的視点を導入することによってはじめて可能となったものと言える。

Ⅱ部においては、琉球王国時代の国家体制と久高島の現行祭祀との関わりについて考察を進めてきたが、その結果として、従来の久高島の祭祀研究においては、久高島と国家体制との関わりを考慮することがほとんどなされなかったために多くの欠陥が露呈しており、イザイホウを含めた久高島のいくつかの現行祭祀は、近世における久高島と王府との特異な関係に注意を向けることなしには、正当な理解には到達できないことを明らかにし得たと考えている。

日本民俗学および沖縄の民俗研究においては、民俗と政治（権力）という課題が主題化されることのない時期が長く続き、ようやく近年になってからその課題の重要性が認識されるようになってきたこと、さらに、沖縄の民俗研究においては、そのような問題意識に基づく具体的なモノグラフの成果が乏しいことを序論で指摘しておいた。

二〇〇八年に吉川弘文館から『沖縄民俗辞典』（渡邊欣雄・他編）が刊行されているが、本辞典の「位牌」「位牌祭祀」「祖先祭祀」の項目解説を読む限り、近世における王府の宗教政策との関連については、まったくといっていいほど目配りがされていない。民俗と政治に関する具体的なモノグラフの成果としての本研究Ⅱ部の意義を、そのような研究史および今日の研究状況のなかに位置づけたいと思う。

以上述べてきた本研究の結論を踏まえて、今後の沖縄の民俗研究に関わることについて、以下の展望を得ることができたと考えている。

まず、久高島の家に関する本研究の成果は、従来の研究では等閑視される傾向のあった琉球の近世期における地割制の下での家の態様をめぐる議論に対して、有力な手がかりを与えることができると思うし、さらに、近世期か

ら近・現代にかけての沖縄の家を通時的視点で考察するにあたっての一つの実証的な研究事例として活用されることが期待できるだろう。

また、家の態様と密接な関連のある久高島の門中の実態や門中と祭祀的世界との関連、さらに門中化現象の実態と近・現代の社会史のなかで門中化現象が有している意味等についての考察も、今後、門中をめぐるそれらの諸問題について地域相互間の比較検討を行なう際に、同じく一つの実証的な研究事例として活用されることが期待できるはずである。

国家体制と民俗との関わりについては、本研究では、考察の対象とした民俗事象の性格のゆえに、近世の国家体制に限定して議論を進めてきたが、今後の研究においては、当然、近代以降の国家体制と民俗の問題についても同様に注意を向けるべきであると考ええる。

つぎに、祖先祭祀をめぐる問題については、国家的聖地であったことが久高島の現行祭祀に多大な影響を及ぼしていることは対照的に、祖先祭祀に関わる王府の政策は久高島にはほとんど浸透していなかった状況を確認することができたが、このことから我々は、祖先祭祀をめぐる王府の宗教政策が、強制的な性格を帯びるほど徹底したものではなかったことが示唆されている、という論点を導き出すことができると考える。

また、祖先祭祀をめぐる王府の政策の地方における浸透と受容に関しては、政策の普及に尽力した人物の存否や在来の祖霊観念等が関わつてきて、地域ごとに異なる状況を想定する必要がある、そのことをそれぞれの地域において明らかにし比較研究することも今後の課題となつてくる。久高島に関する本研究は、その具体的な研究事例として活用されることが期待できるはずである。

最後は、久高島の現行祭祀に、かつての国家的祭祀の残滓が認められるにも拘らず、久高島の伝承世界からはそ

のことがほとんど完全に消去されているという問題に関することである。イザイホウは、筆者が仮定したように、聞得大君に仕える久高島の女性たちに、国王が辞令書を発給するという性格を有していたとするならば、久高島と王府との関係が途切れた時点で、イザイホウは消滅してもよかつたはずなのに、イザイホウと王府との関係についての伝承は失われつつも、イザイホウ祭祀は継続されてきたという事実がある。このように、国家と連繫するものであつた地方の祭祀が、国家との紐帯が途切れた後までも存続することのメカニズム等についても、本研究の成果から立ち上がってくる課題であると考える。

#### 付記

本稿は、大阪大学大学院に博士学位申請論文として提出し、平成二三年三月に学位が授与された「歴史のなかの民俗社会―久高島の社会組織と祭祀的世界の研究―」の要旨である。